

# 土師甕(ハシ)使用の火葬墓(ガメ)について

—豊後国直入郡直入町新田における—

佐藤満洋

## 一、はじめに

昭和三十五年（一九六〇）の七月に、大分県直入郡直入町新田部落公民館の建築工事中に、土師甕を使用した火葬墓らしいものが発見された。全国的に土師甕使用の火葬墓の発見例は数少ないと言われているが、<sup>①</sup>貴重なこの土師甕使用の火葬墓と考えられる遺跡を調査するという幸運に恵まれたので、未熟ではあるがここに報告をしたい。

## 二、遺跡の環境及び調査までの経過

この遺跡は、(チオイリ)大分県直入郡直入町新田部落にあつて、直入町の中心たる長湯温泉場からバスで約十五分の地点で、(セリ)同郡久住町都野地区と境をなす部落である。

この新田部落は、キリスト教に関係のある寺院ではないかといわれている龍宮寺跡と呼ばれる廃寺跡のある小高い山の南側に広がる部落で、直入町の中央を流れる芹川上流が同部落の南端を西から東に流れており、美しい泉が三カ所わき出ている。陽あたりがよく飲用水が十分にあるため、昔から生活するための自然条件に恵まれた地域であることを、弥生式土器片が多数表面採集されたり、また耕作時に田や畑から発見されていることなどからうかがえる。

本遺跡の発見された地点は、この新田部落のほぼ中央部で、標高約五三〇mを数え、県道大分——久住線に接する北側に位

置している。ここは以前は畑であつたが、新田部落が部落公民館をこの畑に建築することになり、昭和三十四年十二月に整地を行ない、さらに三十五年七月に基礎工事を行なつた。そしてこの基礎工事中に遺跡が発見されたのであるが、この発見は七月十三日の夕方であつたといわれる。

幸いなことに。同部落に大分県地方史研究会の大久保学氏がいたため、部落民は同氏の勤めからの帰りを待ちかねていて土器の出土したことを知らせた。同氏は、地区の人たちに遺跡の保護を依頼するとともに、翌朝この旨を筆者に知らせてくれた。筆者はさつそく現場に駆けつけたが、工事が急がれていたため、すでに土器は全部取り出されていた。しかし幸い遺跡は発見時のままにされていたため、発見時の大要を知ることが出来た。筆者はこの遺跡を中心にその周辺を調査したが何も発見出来ず、単独遺跡であることを確認した。

### 三、遺跡及び遺物

まず遺構についてみると、第一図のように、薄い自然石五枚と一枚の蓋石(第一図F)との計六枚を外周施設とする遺構で、ほぼ東西に約六十六糎、南北に約八十二糎(最大巾)、厚さが約五糎前後に赤土を敷きつめたかのように見える焼土が遺構内に見られ、六枚の石全部が表面を強く焼かれていた。

取り出されていた土器片は、土師甕一個分の破片と、土師甕の破片三個であつた。発見者の言にしたがつて、発見時の位置に一応返してみたが、(写真)、甕の口が写真のように東を向いていたという説と、西を向いていたという説とがあつて、残念ながら発見時の様子は知り得なかつた。それでこの写真は遺構の様子を知るための参考として見ていただきたい。

表土は前述のように畑であつたのが、後に公民館建築のため整地されているため、埋葬当時の墳墓の存在を示す標示物の有無や、遺跡の地表からの深さなどは知ることが出来ないが、発見時は地表下二―三糎であつたようである。

またこの遺跡の近くから(建築用地内)土器片が出土した由であるが、中学生が中学校に持つて行つたまま土器の行方がわ

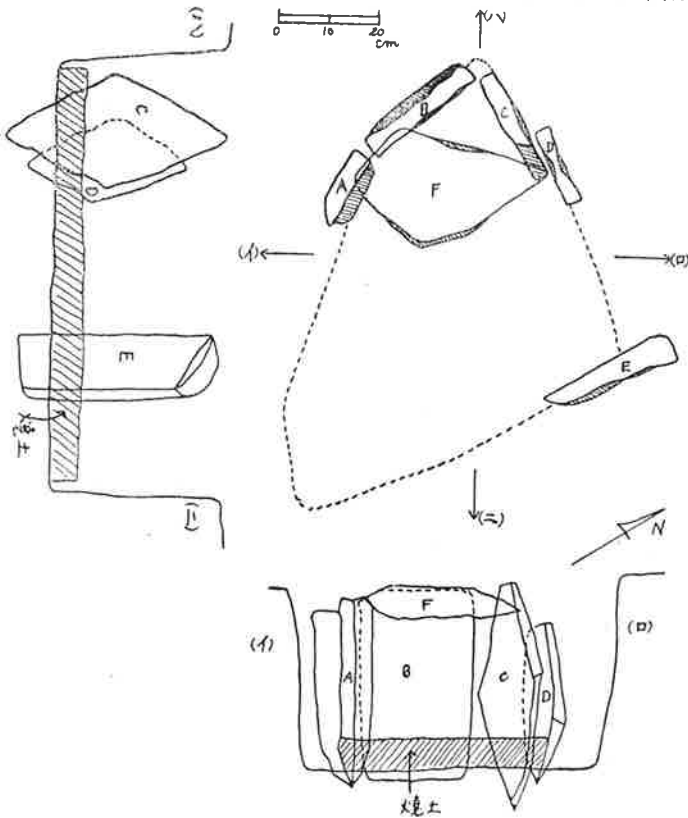
からないので、同種のものか否かを知る  
ことが出来ず残念に思っている。

なお、筆者が調査中に、遺跡の近くで  
弥生式土器片を採集したが、これは直接  
には本遺跡と関係がないと考えられるの  
で、本稿では取りあげないことにする。

遺跡内から発見された土師甕は、口径二  
十二釐、高さ二十五・三釐、器厚一釐で  
胴張りの少ない丸底の甕である。色調は  
黄褐色で、肩部から口縁部にかけて轆轤  
使用の痕が認められる。また土器全面に  
わたつてかろい櫛目文様のもので整形さ  
れた跡があり、一見弥生式末期の土器か  
とうたがわせるものである。焼成は良好  
で堅緻な土器である（第二図一）。

土師甕は口径十四釐、底径八釐、高さ  
三・三釐、器厚〇・五釐で、轆轤跡が顕  
著に認められ、色調は赤褐色を呈してい  
る（第二図二）。なお甕は完全に復原出

第1図 { 大分県直入町新田字石木3851  
（F）  
発見場所は調査。1960年7月。





つしていたりしたため、遺構内からは土器以外には何も遺物を発見することが出来なかつた。また発見者の話では何もなかつたとのことである。

#### 四、考 察

以上で遺跡および遺物についての報告は終るが、筆者は本遺跡を次の諸点から土師甕使用の火葬墓とした見地に立つて論を進めてみたい。

一、遺跡内の土および使用されていた六枚の石が、かなり強度な火で焼かれており、焼土の厚さが五糎前後でほぼ均一の厚さであり、一定の範囲だけが焼けている。

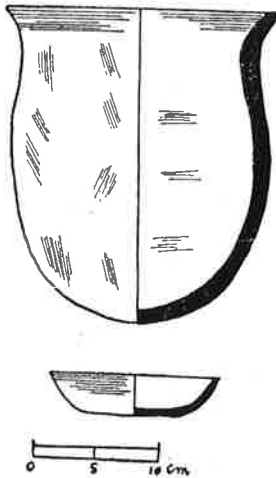
来たが、杯は破片が半分しかなく復原出来なかつた。

これらの土器は、土師器の編年上、何式に属するものか、さらにまた、東九州におけるどの部分に編年されるものか、資料にとぼしいのでこの点は後日あらためて検討したいと考えている。

石槨に使用された石は、厚さ六〜十糎、縦三十五〜五十糎、横十六〜三十糎の自然石を、遺構の地上約二十六〜七糎の高さにそろえられていた。

なお、前述のように、筆者が現場に駆けつけた時には遺構が掘り出されており、掘り出された土は踏みかためられたり散い

2 圖



二、本遺跡内からは土師甕と土師杯だけしか発見されていない。

三、本遺跡の周辺から何も発見されず、単独遺跡である。

四、以上の三点はこれまでに調査報告されている土師甕使用の火葬墓と類似しており、一応火葬墓としての条件を備えている。

すなわち伊藤玄三氏によると、土師甕の蔵骨器を出土する火葬墓はそのほとんどが長胴の甕を使用し、外部施設も副葬品も認められないのを特徴としていられると言われているが、氏の調査した例では土師甕と土師杯各一点と、壙の周辺から鉄釘が発見されているため、木製の外容器があつたらしいことが報告されている。また藤沢一夫氏によると埴生野火葬墓では、凝灰岩の自然石で石室が作られて、中に土師器（有蓋把手付）を蔵骨器として納めてあり、さらに大阪府国分町芝山からも同種の墳墓が発見されていることが報ぜられていることから、筆者は本遺跡を土師甕使用の火葬墓と推定したわけである。

東九州地方から土師器を使用した蔵骨器の発見例がなく、ただ佐伯市白濁遺跡から発見された蔵骨器（須恵器）の蓋に土師杯や椀が一―二使用されているだけである。このため、須恵器などの蔵骨器使用の火葬墳墓との関連などは、今後の研究にまたねばならない。

なお、本遺跡は火葬場所即墳墓の形式をとつていられると考えられるが、この種の類例を求めてみると、大阪府の悲田院構内の火葬墓や、佐賀県稲佐火葬墓、奈良県都介村の小治田朝臣安万呂の墓などがみられる。そして前者を除く二例は、火葬の後に蔵骨器を安置する場合に境内の中央に安置せず、一方に片寄せて安置しているものであつて、これは本墳墓と似ているように思われる。二、三の例だけでは結論は出せないが、これには宗教的な何物かが当時の人達の間にあつたのではないだろうか。今後多くの類例を求めてこの点も考えてみたいと思つている。

また小治田朝臣安万呂の墓は、壙内が火葬の後に清掃されていた模様であるが、本遺跡の壙内に、木炭や灰などが発見者の言葉通りに、なかつたものとするならば、あるいは同様なことがなされたのかも知れない。

本遺跡は石槨が一部分しかないが、焼土があたかも枠があつたように乱れていないことから考えて、当初は全体に石槨があつたものが、後に畑耕しなどのために掘りあげられたのではないかと考えられる。小田富士雄氏は、白鴉遺跡の蔵骨器の考察で群書類従の一部を引用して「火葬のあと湯または酒をもつて火を消すのであるが、茶毘の火を消すのに用いた一組の容器をそのまま蔵骨器に転用したのではないか」と述べている。このような風習があつたとするならば、本遺跡の土師甕と杯の大きさの違いがうなずけそうである。すなわち甕に比べて杯が小さいため蓋の類とは考えられず、単なる副葬品かと考えたが、このような見地に立つと杯は茶毘の火消しという大役を終えたものであり、その後副葬品として埋葬されたものと考えれば、杯のもつ使命が一応うなずけそうである。

なお、佐藤曉氏の御教示によると、杯はわざと割つて副葬する風習が一部にあつたらしいとのことであるが、本遺跡の場合は、杯は約半分の破片しかなく、氏の説明と一致するので本遺跡でもその風習にならつたものであろう。

さてここで本遺跡の火葬についての冒險的な推論が許されるならば次のように考えてみたい。

石槨および焼土が方型でなく、大体において東方を底辺とする三角形（第一図）にあることから、現在残っている石槨の部分に死者の頭部を置き、南向きの屈葬とし（石槨の中にはまるように）、火葬にふしたのではないだろうか。このようにすれば焼土の三角形がうなずけそうである。しかる後に、納骨した甕を頭の位置に安置し、石槨と共通の石蓋をしたのではないだろうか。

以上、新田部落から発見された土師甕使用の火葬墓を紹介し、若干の考察を試みたが、終りに本遺跡の調査にあつて情報を提供下さつた大久保学氏および調査に協力下さつた同部落の方々に深く謝意を表するとともに、御教示をいただいた佐藤曉氏に深謝する次第である。（三六、一〇、二二）

註 ①③ 伊藤玄三「宮城県小山田の火葬墓」（考古学雑誌四五巻四号）昭和三五年三月

② 調査当時は赤土を敷きつめていたと考えたが、後に筆者が黒土の酸性土は焼くと赤土様になることを知り、本遺跡の埴内は赤土では

なく焼土であることを知った。

④ 藤沢一夫「墳墓と墓誌」(日本考古学講座6) 河出書房 昭和三十一年八月

⑤⑦ 小田富士雄「大分県の火葬墓」(白濁遺跡) 大分県佐伯市教育委員会 昭和三十〇年

◎式内火男火売神社史 半田康夫著

B六・一・二四頁 昭和卅五年七月 其神社発行

本書は式内社火男火売神社に就て古代(七項)・大友氏の時代(二項)・江戸時代(四項)・明治から昭和へ(四項)、祭・一遍上人巡錫伝説・鶴見権現とお獄権現の七項目の下に書かれてある。(立川)

◎大分県の民謡 (第一集) 半田康夫・加藤正人共著

昭和卅六年八月十五日発行 頒価六五〇円  
A五並製本文二二五頁 索引五頁

本書は著者両氏がNHK大分放送局の依頼で県下の民謡を調査探収して放送した所産である。而して楽譜は加藤氏・歌詞の説明は半田氏が担当して書いてある。(立川)

◎大分市の文化財 (第二集)

昭和卅五年三月刊 大分市教育委員会編 A五仮

本書は久多羅木儀一郎氏の府内城址(一七頁)・府内藩学址(九頁)・守田三弥助の遺跡(六頁)と大塚高吉氏の松平不審公遺芳集(三二頁)とが所収されている。(立川)

◎大分市の文化財 (第三集)

昭和卅七年三月 大分市教育委員会発行 A五廿七頁

本書の内容は次の三編

(一)、分大富来助教と中村俊一氏の丹生台地(市外佐賀市町)を主とした旧石器前期の文化と先縄文文化(二〇頁)と(二)杉崎氏の大分市庄の原の縄文早期・前期の文化(七頁)に富来氏の予報大分市羽田弥生式後期の土器窯地(二項)が所収されている。(立川)

田北氏「増訂編年大友史料」近刊

先年家わけ及び編年大友史料全二十巻を刊行して、吾が国史学界に寄与し、史学者の絶賛を博した田北学氏は、今度全巻を増補訂正編年大友史料三十五巻に編纂を完了し、目下これが第一巻の出版準備中である。増訂版では、氏の集めた天平以降一万数千の史料を全部編年しており、天文十九年の二階崩れ、以後の宗麟・義統代は元より、大友氏が高家であつた徳川時代の史料から明治維新に至る迄、全部編年してある。勿論大分県史料の中からも直接間接に大友氏に關係のある史料を引用してある。これで古文書で書いた大分県の歴史が完成されたわけだ。百部限定。予価各巻壹千円。(立川)